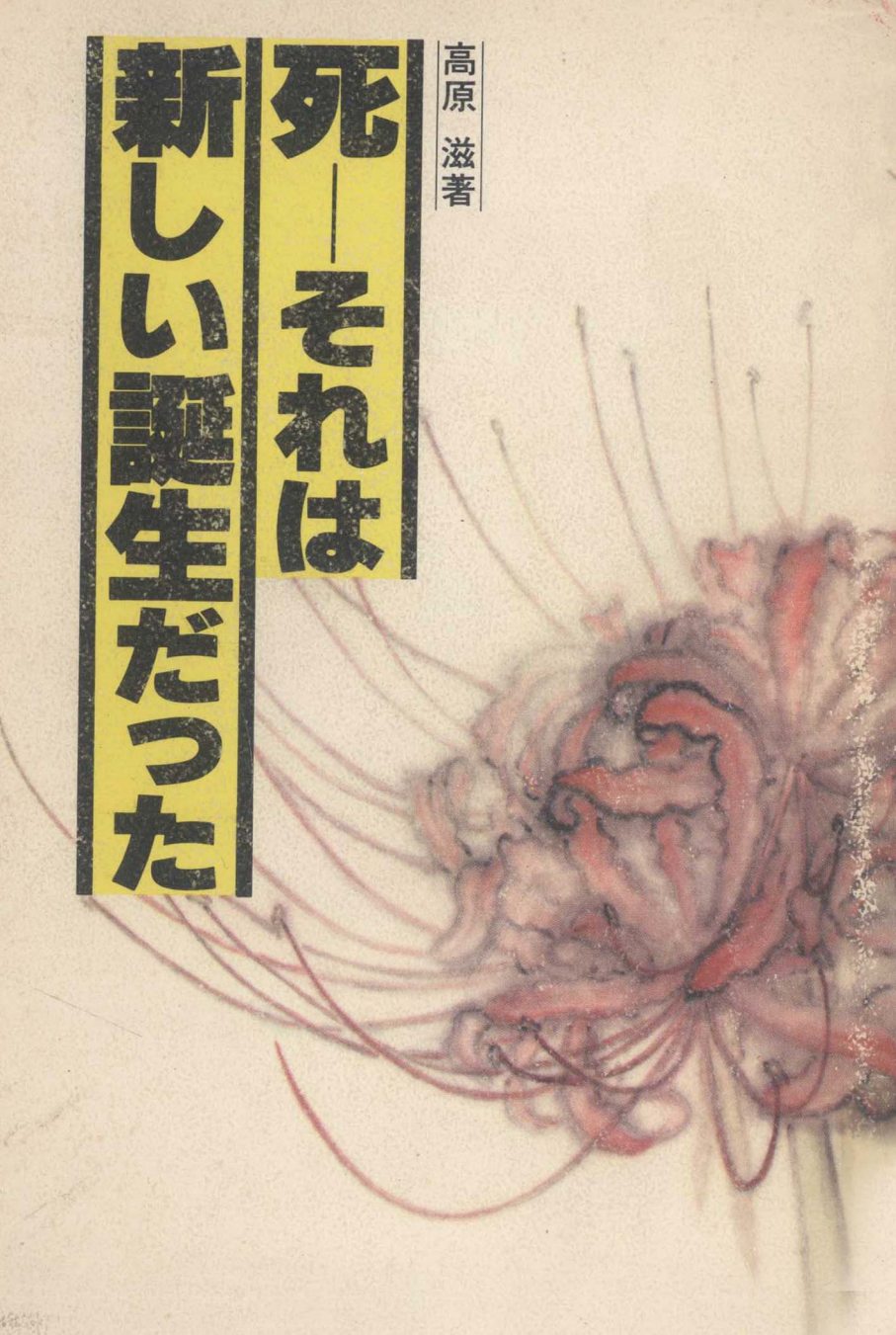
死——それは新しい誕生だった

高原 滋 著



死——それは新しい誕生だった　©

昭和54年2月14日　第1刷

定　価　980円

著　者　高　原　　滋

発行者　伊　藤　太　文

発行所　株式会社　**叢文社**

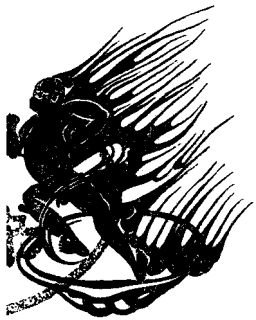
〒101 東京都千代田区猿楽町1－4久松ビル

電話　03（295）0159代表

0093—791408—4224（乱丁，落丁本はお取替えします）

死——それは新しい誕生だっ

高原　滋



◇目次

反俗の子……5
人間の悲鳴……20
自然と人間……26
卑俗の底辺……32
黎明……41
西比利亜回想……54
第二の父……57
名物男……70
カマキリの歌……79
異例の女性……84
掌上の田代……95
盛夫狂乱……108
出産と鬼と……127
都落ち……135

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ヨブ記前書……140
帝王切開前後……143
無一門……149
牛込東榎町保育園……152
痛恨、生命の軌道……158
破局……163
廃人彷徨……182
逆運……191
宗教遍歴……196
ピエロ……216
心霊学叢話……221
山に籠って……232
寂光土……249
山荘割記（象外の人）……260
空洞の生涯……280

表紙　川原田辰子

反俗の子

甲斐玄、正しくは甲斐玄一郎。何故甲斐玄などと称するかというと、小学校上級の頃、新任の若い先生が、初めて教壇に立って出席簿を読んだ時のことだ。

わたしを甲斐玄・一郎さんと呼んで、みんなが笑い出した。おかしな先生で、他の生徒の事もいろいろ変挺な呼び方をして、教室が騒然となって笑いつづけた。

特にわたしの場合、庭球の選手として、わたし自身は知らずにいたが、近郷にまで聞えていたために、皆が特殊な親愛をこめて、以来わたしを甲斐玄と語りならわした。

わたしは現在喜寿を過ぎて、いつ果てるか知れぬ所謂寝た切り老人であるが、不思議なことにこの二三年前から、従来全く意識しなかった或る年代の回想が、まるで白紙に墨汁でも印したように、実に鮮かに蘇って来ているので、反俗と貧窮の苦渋に徹してきた生涯を、取立てて順序もなく書遺す気になった。

あと何ヶ月生きるものか、何年生きるものか判らぬから、果して完成し得るか否かさえ予測し難いが、ただ、この一篇の後半は必ず少なからぬ人々の為に、寄与することが出来ると信じるので、敢てこのドキュメンタリーを遺そうとするのである。

わたしは当時陸の弧島と称されていた南紀の七里御浜に沿って、かがまった様に四、五百戸の群れをなした、半農半漁の寒村に生れた。

四、五歳の頃から綺麗な真砂の広がった海辺に、花莫莚を持出して坐りこんでは、正面から左右遙かに悠遠無限な弧を描いている水平線を、あきることなく眺め乍ら、あの向うには一体何があるんだろうか、一度あの向うまで行ってみたいものだと、いつも様々な空想に耽ったものだ。

空想といえば同じ頃のこと、今も忘れない一つの回想がある。

その時代は電灯などというものがなく、皆ランプだったもので、そのランプのホヤの掃除が、わたしに課せられた日課だった。が、或る夕方のこと、ホヤを拭い終って灯をともしてから、何ということもなく見守っているうちにふっとこんなことを考えはじめた。

—このランプは一体、本当のランプそのものなんだろうか、おれがランプだと思って見ているが、それはおれが思っているだけのことで、本当のランプなのだろうか。おれがランプだと考えて見ているということが、本当のランプだという証拠は、何処にもないではないか。おれがランプだと思っているだけのことで、それはランプの知ったことではない。

子供のことで現在記憶している様に、正しく表現し得た訳ではないが、何だか訝しなことに思

われてきて、恰度そこへやって来た親父に訊ねてみた。
「何だ、こいつ。妙なことをいう奴だな。何を思い出したんだ。ははは……」と笑い飛ばされて、おれはどうかしているのかなと首をひねった。
その後もこのことが妙に気になって、ひとりで考えこんだものだが、いつの間にか忘れてしまって、他のことに気をとられていたものの、時々ひょいと思い出しては、変なことだなと気になっていた。
とはいっても、別に所謂、内攻性の子供だったという訳ではなく、一方では村一番の腕白坊主という評判で、喧嘩ばかりしていた。
当時のこと、かねて騎兵隊に入っていた、徳という漁師が休暇で帰省して、わたしの前で例の上着の胸一杯に、黄色の横条の物々しく並んだ服の胸を張って見せた。
「どうだえ、坊ちゃん」といいさま、長い剣をすらりと抜いて見せた。わたしは徳のいやに威張った態度が、ぐっと癪にさわって、
「何だ、そんなもの」といったまま、背を向けて見向こうともしなかった。この時から既にわたしの兵隊ぎらいがはじまったようで、後年になるほどひどくなった。
わたしは母が四十一歳の時、七人目にはじめて産んだ男の子だということになっている。なっているとは怪しげな言い方だが、これには少し訳がある。
上から四番目の姉が、或る時わたしにこんな話をした。わたしがまだ赤ん坊の頃、母が奥の間

で添乳をしていた所へ、突然烈しい地震がゆれ出した。その途端に母は、赤ん坊のわたしをそのままにして、自分だけが、庭の遠くへ逃げたことがあったと囁いた。その頃既に小学校に上っていたわたしは、他の姉にその話を糺してみたが、一言の下に叱りつけられてそのままになった。

この母親は隣県新宮藩の勘定方の武士の一人娘で、しかも藩内随一の美人とあって、若侍達の評判の的になっていたそうだが、一度同藩の侍の許に嫁して、間もなく離縁になり十九歳の時に、村の戸長（庄屋の如きもの）の長男である父の許へ再婚してきたものでこれがわたしの生涯に重要な係わりを持つことになる。

わたしは幼時、近所の女房達のもて余しもので、喧嘩ばかりしていながら、相手をやっつけた後では、妙に淋しい様な悲しい様な気分になって、一人で考えこんだ覚えが少くない所を見ると、この少し異なった内向性は、どうやら素質的なものであるらしい。

父親は尾崎号堂門下の逸材として、壮年時代は大分活躍して、多少この地方の為に貢献する所があったらしいが、その為に祖父が築いた資産をすっかり空にして、わたしが小学校に通う頃には、既に何もなく、勝気な母が娘達を相手に、少しばかり残った田畑を持ちこたえて、漸く食い継ないでいた。父自身は全く家計を顧りみず、狩りや釣りに日を過ごしていたが、わたしが十歳になる前に、とうとう家も田畑も一切手離して隣県の新宮に引移ることになった。

その時分には姉達は既に、それぞれ家を出て自活したりお嫁に行ったりしていて、わたし一人が父につれられて、追われる様に村を離れたのであった。確か伊藤博文が朝鮮で暗殺された年だ

った。

さて新宮に移ってはじめて住んだ家は、堀の内とかいって、幅十米ばかりの長い蓮池をへだてた所にある一軒家で、向い側が、新宮で三つあった中の一番大きな小学校だった。

二、三年前から不意に明白な記憶としてよみがえってきたのはこの頃からのことだ。

昔の田舎の小学校のことで、勉強などということはやった覚えがないが、ただわたしは運動が好きで、といっても当時は運動といえば庭球だけで、わたしは何も気がつかずにいたが、近郷にまで知られた庭球選手として、後々まで甲斐玄時代と称されたとかで、下級生達のあこがれの的だったのだそうだ。

親父が中学にはいれというので、十三か十四の時入学試験を受けて、百四、五十名の内二十四番だかで、新宮中学の一年生になり、白線の一本はいった帽子をかぶることになった、所謂甲斐玄時代は中学にはいっても続いた。

それはいいが、みんな新調の詰襟服の中でわたし一人、母親が知り合いの上級生の古服を貰ってきて、色も灰色に汚れ、上着は短くて、お尻の半分あたりまでしかないのを着せられて、これには参った。

学期毎の試験で皆が、今の所謂ガリ勉に夢中になっている時でも、教科書など見向きもせずテニスばかりやっていて、一年生の時から全校名うての選手だった。

二年生になるとまた、一級下の新入生達から、随分したわれたようで、中には西辺という、若

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

い女の様な柔かい肌の奴がいて、何かというとわたしに抱きつきたがって、その度にわたしの方が変挺なセンシュアルな気分になるので弱った。

理屈でもこねたものか、上級生にはひどく憎まれて、喧嘩ばかりしていた。

学校の教科がつまらなくって、勉強などはあまりしなかったが、その代り校舎の一隅にある、所属の図書館にはよくはいった。

愚直で変に迂濶な癖に、妙に強情な所があって、上級生が憎んだのも尤もだと今では思うのだが、何しろ学資というべきものが一文もなく、文房具等も友人の使い残しを貰ったり、書き損ねた用紙を貰って、鉛筆書きの所をゴムで消して使ったり、毎月末には必ず授業料未納者として、講堂の壁に張出されたり、今考えてもよく辛棒出来たものだと思うが、三年になって間もない頃のこと、つまらぬことから博物の教師で、これはもう生きてはいまいが、阿久津某という教師が、何でもいちごの話だったと思うが、ずっと後の席にいたわたしが、舌なめづりをしたといってそんなさもしい奴は碌な者にならんとおこり出した。

舌なめづりなんかしませんと抗弁すると、お前のような奴は一番前の席へ移れといって、私の席を教壇の直ぐま下へ移させた。わたしは憤然として机を蹴倒し、教室から飛出して家に帰ってしまった。

この阿久津という教師は、わたしの一年生の時にも、皆に、将来何になるつもりで学問をするのかという質問を出して、一人一人に答えさせたことがあって、何しろ田舎中学の一年坊主のこ

とだ。そんなことを考えている奴はいず、みんな大臣になるの大将になるのと、いい加減な出鱈目を並べてすましていたが、馬鹿正直なわたしは何と答えていいか判らず、ひとり心の中でうろたえているうちに、とうとうわたしの番になった。仕方がないから立上ったものの、何と答えていいか考えつかない。

「何でもいいからえらい人になりたいと思います」と答えた。

「何でもいいえらい人ってのがあるか、馬鹿だな、こいつ」

まわりの者がげらげら笑い出した。

「何でもいいんです。えらい人になりたいんです」

「だから何でもいいえらい人ってのはどんな人だ。こいつ少しおかしいぞ、みんな判るか」

教室中どっと笑いの渦だ。わたしは一人立ちすくんだまま真赤になっていたが、決して承服した訳ではなかった。

平生から心の中で、何にでも理解の持てる人間になりたいと思っていたから、何気なくそう答えたのだが、みんなが笑い出したものだから、突っ立ったまま、真赤になってしまった。併し決して承服したわけではない。ただ子供のことで条理を立てて説明が出来ずにいただけのことだ。今でももしこの阿久津に出逢ったら、徹底的にやりこめてやりたいと、執念深いことを考えることがある。

兎に角こんな調子で、わたしに当るので、いやな奴だと思っていたものだから、席を前に移せ

といわれると、急にカッとなって、何もこんな学校へ通うことはないと、そのまま二、三日は家でごろごろしていたら、親父が、

「どうした。お前この頃学校へ行かんでいるが」

教師と喧嘩したというと、

「平教師などと喧嘩して逃げてくる奴があるか。喧嘩するなら校長とでもするがいい」

という。

それもそうだと思ってまた学校へ通いはじめた。しかし校長と喧嘩するといっても、校長は授業をしないし、別に校長には腹を立てる訳もないから、何とか理由を見つけて学校をやめたいという、わたしの希望は当分望みがなさそうだ。

弱ったなと思っていた折から、或る日テニスを一ゲーム終えて、コートの後に下っていたら、恰度そこが校長室の窓の外で、校長は窓を開け放ったまま、椅子にそり返って新聞を読んでいる。何気なく見ていると、彼は新聞記事を読むのに、そこいらの人足か何かの様に、一語一語唇を動かして読んでいる。呆れて少時ぼかんと見ていたが、急に校長を軽蔑せずにいられなくなった。

担任の教師の話によると、私は「兎角人を人とも思わぬ所がある。」のだそうで、成る程そういえば、上級生にも随分憎まれていた様だ。

近頃の青年のように、卒業証書がめしの種になるものだなどとは、考えることも知らなかったことだし、学校の教科がまるで無駄なことに思えてならず、新聞を声を出して読む校長を見て、

その日家にかえるとすぐ、藁半紙に退学届を書いて、親父の印を勝手に押して、郵便で送ってしまった。

二、三日したら親父が、又喧嘩かという。

「いいや、もう学校はやめた」

「そうか」

それっきりだった。

さて学校をやめては、あの図書館へ行くわけにもゆかず、毎日することもなく、家でゴロゴロしているうちに、親子三人の衣食の為に、母親が一人でその日その日を、四苦八苦している実情や、月末になると、家賃の催促に平身底頭している姿を見て、これは俺が働く外はないんだと考えはじめた。

とはいっても小さな町のことで、どこにでも働き口が見付かる訳ではなかったが、或る日何となく街を歩いていたら、ふと一軒の紙屑問屋の表に、小さな求人札のぶら下っているのが見つかった。

その家の中は床から天井まで、ぎっしりと古新聞や古雑誌が積み込まれてあって、その間の、漸く人間一人通れるだけの隙間を奥の方へ連れられて行った。

二人の上さんと、六十過ぎの婆さんとが、せっせと古雑誌をほぐしている。

「白い頁と色の頁を選り分けりゃいいんだ。出来るだろう」と主人がいう。何でも二銭か三銭の

日給だったと思う。
母親が悦んでくれるので、毎日朝から夕方までそこで働きはじめた。
そのうちにふと面白いことに気がついた。
古雑誌の中には時々、これは読んでおきたいなと思う頁が見つかる。その度にそいつをわきにのけておいて、昼飯時間に読み耽けるのが楽しみだった。
母はそんな所で働かせて悪いねえ、そのうちわたしが誰かに頼んで何かいい仕事を探すからねといっていたが、私自身は別に苦にもせず、恥ずかしいとも思っていなかった。
或る日そのぼろ雑誌の中から、表紙が半分剝げかかった、ポケット判の哲学辞典というのが出て来た。
こいつはしめたと、そっと懐中にねじ込んで、そのまま自分のものにして、朝に晩に読み耽った。驚いたことには、その中に、「認識論」という項目があって、それが何と、例のランプの一件をはっと思い出させた。
「おや、おれの考えていた事は、決して馬鹿馬鹿しいことではなかったぞ」
心をおどらせたのはいうまでもない。わたしは懐中からはなすことなく持ち歩いて、その古ぼけたポケット辞典を、熱心に読みつづけた。
それからである。家計の為にも勿論であるが、もっともっといろんな本を読む為に、何としてでも人並なお金になる仕事をはじめなければならん。家計もさること乍ら、少しでも本を買う為

にと、切実に考えはじめたのは。

それから間もない或る日の夕方、以前から、何かにつけわたしに近づいていた、木賃宿の倅の鉄平というのに、バッタリ出くわした。

「やァ甲斐玄じゃないか」

二年か三年か年長で、ガッシリした体格の、小学校時代の餓鬼大将だった。こいつが、最近新宮にはじめて出来た、大がかりな製紙会社の職工をやっているとかで、

「おれの会社なら日給五十銭位にはなるぜ。そんなケチな仕事なんかやめなせえ」という。

もとめよ、さらば与えられんというが、何しろ日給五十銭になるなら、立派に一家をささえてゆける上に、自分の小づかいも多少の余裕が出来る。

「そうか、じゃ早速頼むぞ」と飛びついた。

しかし、育ちがまるで異質の鉄平と違って、わたしは何しろ坊ちゃん育ちの、しかもまだ十六才になったばかりだ。果して一人前の職工として役に立つものかどうか、内心心細かったが、鉄平は、

「なあに、おれがいい持場を頼みこんでやるから」と、早速その翌朝、鉄平に連れられて行って、その日から二階の原料部で働くことになった。

階下にある直径三、四米もある大釜で蒸し上ったボロを、トロッコに受けてエレベーターで二階に上げ、受持のニーダという円形の大舟に投込んで、ぐるぐると急流になってまわるボロを、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.